

# European Living in Japan

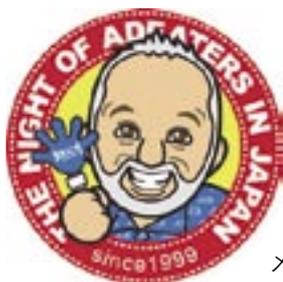
## 日本で活躍するヨーロッパ人

The Frenchman Who Has Learnt To Be a European

## ヨーロッパ人であることを学んだフランス人



30秒ほどの短時間で視聴者にメッセージを伝えるコマーシャルフィルム(CM)。練りに練った筋書きと、選りすぐった音楽と映像による表現は、時代を反映するとともに文化的特性や国民性を端的に映し出している。福岡在住のフランス人、ジャンクリスチャン・ブーヴィエ氏は各国各様の作品を一堂に集めて上映する「世界のCMフェスティバル」を日本で主催している。



パリ出身のジャンクリスチャン・ブーヴィエ氏が、イベントマネジメントの世界に足を踏み入れたのは、8年前のことだ。その時彼は貴重な教訓を学んだ。「<世界のCMフェスティバル>のオールナイト上映を初めて企画した時、周囲からは無茶だと言われました。60年代じゃないんだから、オールナイトのイベントなんてうけないということです。ところが会場が430席のところ、チケットを550枚も売ってしまい、仕方なく座布団を用意して、自分の知り合いに移ってくれと頼んで回りました。一般のお客様のために座席を譲ってもらったのです。イベントでチケットを多く売りすぎは失敗です。少なすぎる方がまだましなのです」。

「親戚のおじさん」といった印象のブーヴィエ氏だが、Tシャツとジーンズに身を包んだ姿とその熱意からは、58歳という実年齢を感じさせない。福岡市西部の広い借家には、妻の新車プリウスと対照的に、年季の入ったクラウンエステートが停まっていた。車の屋根にはサーフボードが載っている。背後に、サーフボードが3本、さらにボディボードも目に付いた。「でも、今年はあまりにも忙しくて、海に行く時間が全然ありません」。本人は残念そうに言う。

## 来日

ブーヴィエ氏は1974年に初めて日本を訪れた。「まだヒッピーだった私は、大学卒業直後で、どこか遠いところへ行きたくて日本を選びました。フランスから陸路で来ようとしたのですが、2回だけ飛行機に乗らざるをえませんでした。台湾経由で日本に入り、沖縄を通して東京に着いたのです」。

いったんパリに戻ったブーヴィエ氏は、大学院修士課程で2年間フランス文学を研究した後、フランスの国民教育省を通じて九州大学に職を得た。そこには14年間いた。

「普段はフランス語を話し、授業は週4回だけ。何を講義してもよかったので主に古典を教えていました。住まいは、ヨーロッパに一度も行ったことのない日本人建築家が1920年代に建てた大きなヨーロッパ風の家でした。とにかく自由だったのです」

次の職場となった九州芸術工科大学でも、自由な環境はそのままだった。しかし、ブーヴィエ氏はここで、現在の仕事の中核をなすマルチメディアを使った活動に着手した。もちろん、通常のフランス語の授業も続けながらである。ブーヴィエ氏は、このような自由な雰囲気「アカデミズムの退廃」と呼ぶが、そのおかげで彼は授業の教材にテレビコマーシャルを使うことができたのだ。きっかけは、1990年初めに大学の図書館で、オーソン・ウェルズのニッカウスキーの宣伝など古い日本のCMが入っ

た映像資料を偶然見つけたことだった。

「CMは教材として非常に面白いと思いました。もちろん、文学の授業もやりましたが、学生たちには視覚的な刺激も必要だったのです。日本ではそれまでCMを教材に使った人はいませんでした。私は、オーソン・ウェルズからジャン・レノに至るまで、日本のテレビCMに登場する外国人タレントの歴史を紹介したのです」

日本の学生は授業ではおとなしいことでよく知られているが、この授業では積極的な反応を示した。「視覚教材を使うと、どんな文化的なテーマについても、質問に答えてくれました」とブーヴィエ氏は言う。「特にCMは1本ずつが短いので、教材としてちょうどよかったのです。当時は、映像を教材用に編集するのも楽ではありませんでしたから」。

## 道が開ける

転職は1999年2月に訪れた。退職する同僚の送別会でテレビCMをまとめて上映したところ、大講堂いっぱいの聴衆から驚くほど大きな反響があった。翌月、例年通り休暇で母国に帰ったブーヴィエ氏は、フランスで「CM食べ放題の夜」("Nights of the Adeaters")というイベントを開催しているジャンマリー・ブルシコ氏に連絡を取った。ブルシコ氏は70年代後半からフランスのテレビCMを集めており、入場料を取ってCMを観客に見せることを思いついた人だ。「CM食べ放題の夜」は今や世界中に広がり、今



年で27回目を迎えている。

ブーヴィエ氏は、このイベントの日本でのフランチャイズ権を手に入れ、福岡に戻った。現在、年間15,000ユーロに上るフランチャイズ料と引き換えに、彼には「CM食べ放題の夜」の名称を使用する権利と世界各国のCM500本を上映する権利が与えられた。一方、日本版「CM食べ放題の夜」を実現したいという彼の夢をかなえるため、福岡のフランス人の友人5人が、ブーヴィエ氏の50歳の誕生日プレゼントに、50万円を寄付してくれた。ブーヴィエ氏は自分で集めた50万円を足し、合計100万円の予算で活動を開始した。うまくいかないかと心配するむきもあり、また自身がイベントマネジメントの素人であったにもかかわらず、第1回「世界のCMフェスティバル」(日本版名称)は大成功だった。

うわさは徐々に広まっていき、2000年にブーヴィエ氏は沖縄と大阪での小規模なイベントに招待され、その翌年には小さな制作会社と組んで東京デビューを飾った。上映会には、バンドが付きものだ。一種のチンドン屋だが、演奏はジャズ風。メンバーは全員、九州芸術工科大学の元学生で、社会人となってからも飲食や交通費と引き換えに、毎年演奏するのを大いに楽しみにしている。

## 予想外の転職

2004年になって、ブーヴィエ氏は思いがけずCMフェスティバルに本腰を入れざるを得なくなった。九州芸術工科大学が九州大学に吸収され、さまざまな内部事情から自身のポストがなくなってしまったのだ。

職を失い、以前よりもCMフェスティバルに多くの時間とエネルギーを割くようになったブーヴィエ氏は、2006年には17

都市で30回の上映を果たした。上映は、昼間の3時間またはオールナイトで行われるが、特に後者

の場合、観客はCMの映像や音に合わせて、風船を飛ばし、「パチパチ」というグッズを鳴らし、飲み食いしながら夜を明かし、会場は熱狂した雰囲気包まれる。

昨年、ブーヴィエ氏は忙しいスケジュールの合間を縫って、設立5周年を迎えた福岡EU協会のために「世界のCMフェスティバル」の特別版を制作した。世界中のCMを対象とする代わりに、EUの25加盟国(当時)に焦点を当て、その多様性と共通点の両方を紹介した。この試みは格別の成功を収め、ブーヴィエ氏は今後もEUをテーマとした上映をしたいと考えている。

彼はEU版制作のため、「欧州に関する本をいろいろ買いました。それまで、欧州やEUに関する堅めの本はほとんど読んだことがなかったのです。手に入るものは本当に何でも買いました」と言う。読んでみると「学ぶところが多く、だんだん自分が<欧州市民>であるという意識が出てきました」。

CMフェスティバルの仕事が増えた結果、ブーヴィエ氏のもうひとつの仕事も事実上終わりを迎えることになった。実は彼は、獅子文六や西村京太郎、江戸川乱歩といった日本人作家の小説や子ども向けの本をフランス語に翻訳しており、これまでに30冊以上の訳書を出している。

「80年代には、私は日本語翻訳の<第3の波>とも呼ぶべき動きにかかわっていました。19世紀に古典が翻訳され、その後70年代後半までは川端康成、三島由紀夫、谷崎潤一郎といった著名な作家の作品が翻訳されていったのですが、80年代になって、私のような専門家以外の在日フランス人が大衆文学の翻訳に携わるようになりました。フランス人が日本や日本文化をもっと身近で親しみやすいものとして受けとめられるよう、手助けし

たかったのです。しかし、私たちはやりすぎたようです。今ではフランス人が日本と言われて思いつくのはマンガやくたまごっち>ばかり…ひどいもんです」

2007年のCMフェスティバルの開催地は21都市になる予定だ。だが、ブーヴィエ氏は、上映回数の多さで成功を測ることはできないと言う。

「問題はスポンサー探しです。最初はフランス企業がスポンサーについてくれたので、とてもラッキーでした。でもその後、担当者が代わったりして……。スポンサー抜きには開催はできないし、年間500万から600万円は必要なのです」

福岡の景気は上向きではあるが、それにしても、上映回数を17から21に増やしたことは失敗だった、とブーヴィエ氏は悔いている。そのせいで資金調達に割く時間が大幅に減ってしまったのだ。

4人の子どもたちはすでに成人して家を巣立っていった。もうすぐ定年になって年金生活だと笑うブーヴィエ氏だが、身軽で人好きのする彼が庭いじりに専念している姿など、正直いって想像もつかない。彼はまた、平等主義者でもある。「今やっているのは、世界中で社会の中の女性の役割がどう変化しているか、それが欧州と中国、インドでどのように描かれているか、に焦点を当てたCM集の編集です」。

ブーヴィエ氏が隠居生活を送るのは、まだまだ先のことになりそうである。 



Jean-Christian Bouvier  
ジャンクリスチャン・ブーヴィエ  
イベントプロデューサー

フランス・パリ出身。1977年九州大学の外国人教師として来日。同大学で14年、九州芸術工科大学で13年勤務。現在は「世界のCMフェスティバル」事務局を運営。イベント以外にも、「DVDで楽しむ世界のCMフェスティバル」の監修および解説も行っている。また、日本文学の翻訳も手掛けるなど活動は多岐にわたる。

<http://www.cmfestival.com/>